

2 外国稲品種の特性調査概要

最近、米の飼料化を目的として、外国稲の栽培が行われているので各国の品種を収集して、農試本場ならびに県南分場において栽培特性と収量性について検討した。その結果冷害年のため十分各品種の能力を発揮できなかった。玄米収量の最高は、県南分場ではアルポリオで49.1 kg/10aでトヨニシキ対比73%（多肥区）。本場では矮脚南特22.6 kg/10aでフジミノリ対比39%であった。

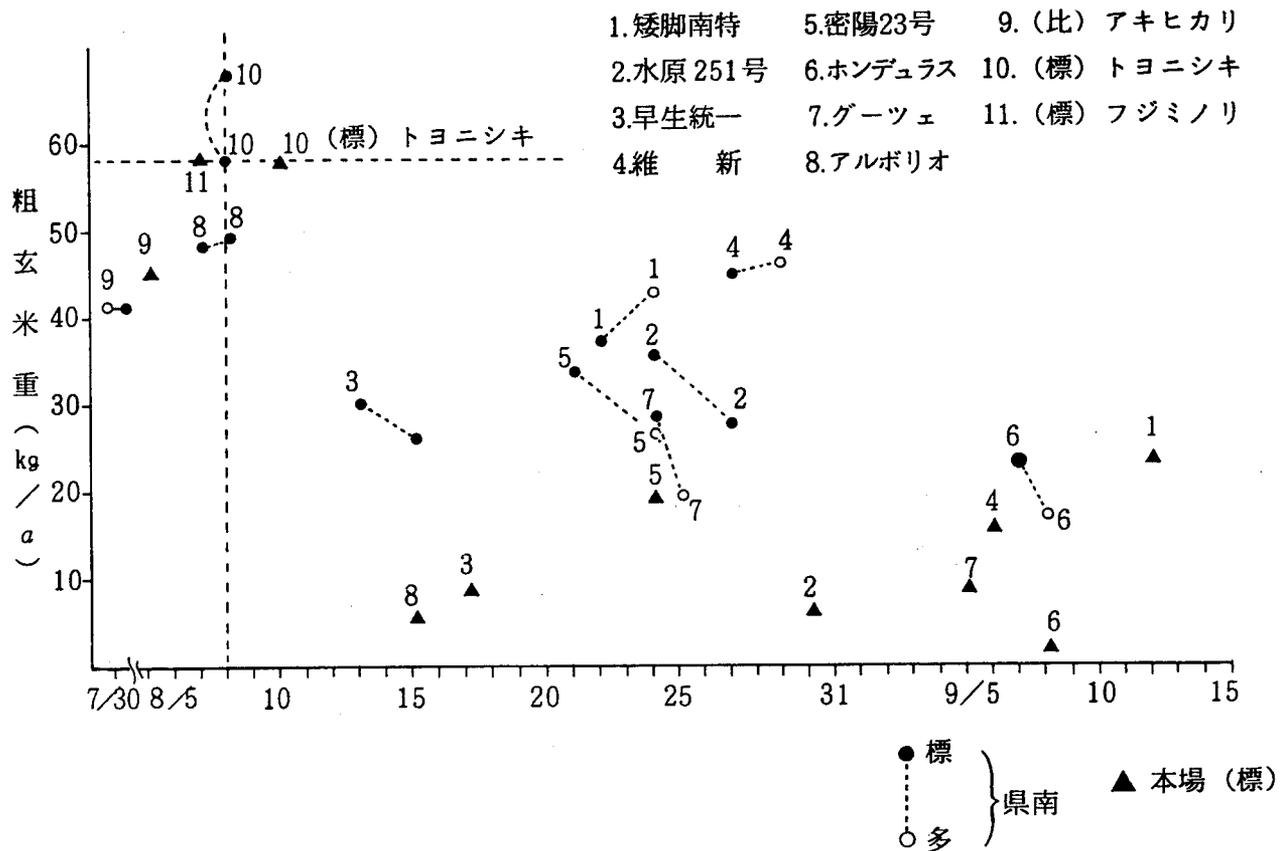
(1) 背景とねらい

各地で飼料米の試作が行われ、そのほとんどが外国稲である。このため各地の外国稲を収集してその品種特性や収量について検討しようとする。

(2) 具体的データ

1) 外国稲の出穂期対粗玄米重

第1図 出穂期対収量



2) 結果の要約

- (1) 苗の生育、韓国稲品種は短苗で草状はやや伏性を呈しているため、機械移植では植付精度が心配される。また葉色は全般に淡緑で葉幅が広く、とくに、日本稲に比較して早生統一、矮脚南特は出葉速度が早い。

ホンジュラス、グウーゼ、アルポリオは長苗で草状も直立型である。

ホンジュラス、グウーゼはやや出葉は遅れる。

- (2) 本田生育 韓国稲品種は短稈（長36cm～59cm）でアキヒカリより10cm～25cm短かく穂数はやや少なめ、穂長は長く極短稈の穂重タイプの草型となる。ホンジュラス、アルポリオは長稈で穂数はアキヒカリの50～60%で長稈穂重タイプ、グウーゼは長稈で穂数タイプの草型となる。

- (3) 出穂・成熟期

アルポリオはトヨニシキ並の出穂、成熟であり、県南平坦部では熟期的には栽培は可能である。

早生統一はトヨニシキより5～7日出穂が遅く、矮脚南特、水原251号、維新密陽23号、ホンジュラス、グウーゼの6品種は8月20以降の出穂となり県南平坦部でも熟期的にみて栽培は不安定である。

- (4) 玄米重（粗玄米重）

今年の異常気象下での県南分場での玄米収量をみると、外国稲品種の中ではアルポリオが標肥で48.2kg/a、多肥で49.1kg/aと最高収量となったが、トヨニシキに比較しては、標肥で83%多肥で73%の収量比率となった。

- (5) 玄米の粒形

外国稲品種はいずれも長粒に属し、日本稲と外見上は判別は出来る。

- (6) 外国稲品種は脱粒性は易で機械収穫上問題はあるものと推定される。

- (7) 本場における試験結果は、今年供試した品種は晩生種から極晩生種に属しており、また、昭和51年を上まわる異常気象下での試験のため出穂、成熟の遅れが大きく、不稔も多発し外国稲品種の中で最高収量は矮脚南特の22.6kg/aでフジミノりに比較して、39%の収量比率となった。